

# 考古遺物を活用した学校教育への協力ー出前授業を中心にー

佐竹 桂一

## 1 はじめに

全国では毎年約1万件近くの膨大な量の発掘調査がなされている。新聞やテレビ等のマスコミ報道も頻繁に繰り返され、ニュースソースの中で文化財報道は一定の位置を占めるに今日は至った。それをきっかけに、埋蔵文化財を守っていかうとする一般の人々を中心とする保護運動が各地で広がりを見せている現象が出てきた。

我々考古学に携わるものが、広く一般の人々に埋蔵文化財の大切さを伝える機会として、これまでは調査説明会や遺跡報告会で成果を公表することを常套としてきた。こうした動きは今後も啓蒙活動の主流として行われていくことは間違いなく、またその効果も甚大なものがあると思われる。

しかしながら、説明会に参加する関心層は、中高年を中心とした世代が圧倒的で、若年代まで浸透しているとはお世辞にも言い難い状況である。もっと広い世代に訴え、関心層を広げていく努力が今我々に問われている。

各地の埋文センターや調査機関がそうした問いに答えるべく始まったのが、出張講座や体験学習・イベントの実施である(中村2001)。また、学校における「総合的な学習の時間」を有効利用する試みも各地で始まっている(吉久2001)。

平成9年には、文化庁次長通知「出土品の取り扱いについて」により埋文調査機関は積極的に学校教育への協力に取り組むよう指針が示されている<sup>1)</sup>。

山形県埋蔵文化財センターにおいても、県民を対象とした「縄文フェスティバル」の体験イベントを2年にわたり実施したのをはじめ、「出前授業」と銘打って学校教育への協力を開始し、これまで見過ごされがちだった子供たちへの啓蒙活動をスタートさせたところである。

本稿は、山形県埋蔵文化財センターにおける出前授業の構造とその方法・実践を紹介するものである。埋蔵文化財保護の啓蒙普及に資する活動として念頭においていただければ幸いである。

## 2 出前授業の事業化

出前授業は、本センターの啓蒙普及活動の中の新しい事業として始まった。

中心セクションとしては研究課がその役割を担っている。事業化にあたりセンター内では調査課・研究課兼務の職員が中心となり準備をすすめた。必要に応じて全員が協力する体制を確認し、教材開発は報告書作成の合間を縫って行い、多くの職員を協力を得ることができた。前述した体験イベント「縄文フェスティバル」の準備と平行していたことが幸いしていたといえよう。

学校に対しては、受付時に、授業は学校教師が主導であることを確認し、センターへの丸投げ意識をなくすことを心がけてきた。また、センターを活用しやすいように職員派遣の扱いを工夫した結果、前年度3件だった依頼が今年度18件に増加することとなった。

## 3 出前授業の構造

出前授業は4つの柱で構成している。この4つは相互に絡み合いながら、授業を構成するもので、対象学校・学年・子供たちの状況に応じて絶えず変化をつづけるものであると考える。事実、4つの柱の比重は授業によって変化し、多様な授業パターンを生み出す要素となっている。

<4つの柱>

### i 地域素材

地域素材は、社会科や生活科等において重要視されるところで、学校現場では教材開発に特に熱心な分野である。埋蔵文化財はその点で、遺跡の存在そのものが地域素材であり有効活用が期待できる。

身近にどんな遺跡があるのかを調べたり、学校の近くで出土した遺物を目の当たりにすることで、自分たちのアイデンティティーを再確認する場ができるのである。したがって、出前授業では学校の周囲で調査された遺跡を調べ、そこから出土した遺物を披露することを重要視

している。

ii 実物観察

埋文センターの強みは、出土品を大量に保管し、直に手に触れる環境を作りやすいことである。展示を前提としている博物館にはない、機動力を発揮して学習者の手に実物を届けることができる点が大きな利点である。

子供たちは教材レプリカに触れたことはあっても、本物の土器に触れる経験はほとんどない。本物をどんどん触らせ、その迫力や質感を感じることで感性を刺激することをねらいとするものである。

iii 体験活動

体験活動は、出土資料をもとに道具を復元し、それを活用する方針をとっている。こうした活動は全国各地で行われており、そのノウハウは他県での活動に学ぶべき点が多く、参考にさせていただいている<sup>2)</sup>。

学校では、体験活動がもっとも子供たちの人気が高く本県における出前授業の主流となっている。

子供たちは遊びの延長として体験活動を好むが、授業

を仕組む側としては、子供たちの行動を予測しながら、発問を吟味し話材を準備しながら緻密な効果を狙っている。

また、体験活動はその性格から大きく二つの領域に区分することができる。

体験活動の二つの領域

<生活体験>・・・いにしえの人々の暮らしぶりを出土遺物や遺構情報を用いて復元し、その一端に触れる。

- ・火起こし
- ・矢とばし（バーチャルハンティング）
- ・古代米試食
- ・石器カッター使用
- ・縄文風衣装試着
- ・木の実割り

<ものづくり体験>・・・出土遺物から当時どういものがつくられていたか、先人のものづくりの知恵を考える。

- ・勾玉づくり
- ・アンギン編み
- ・土器づくり

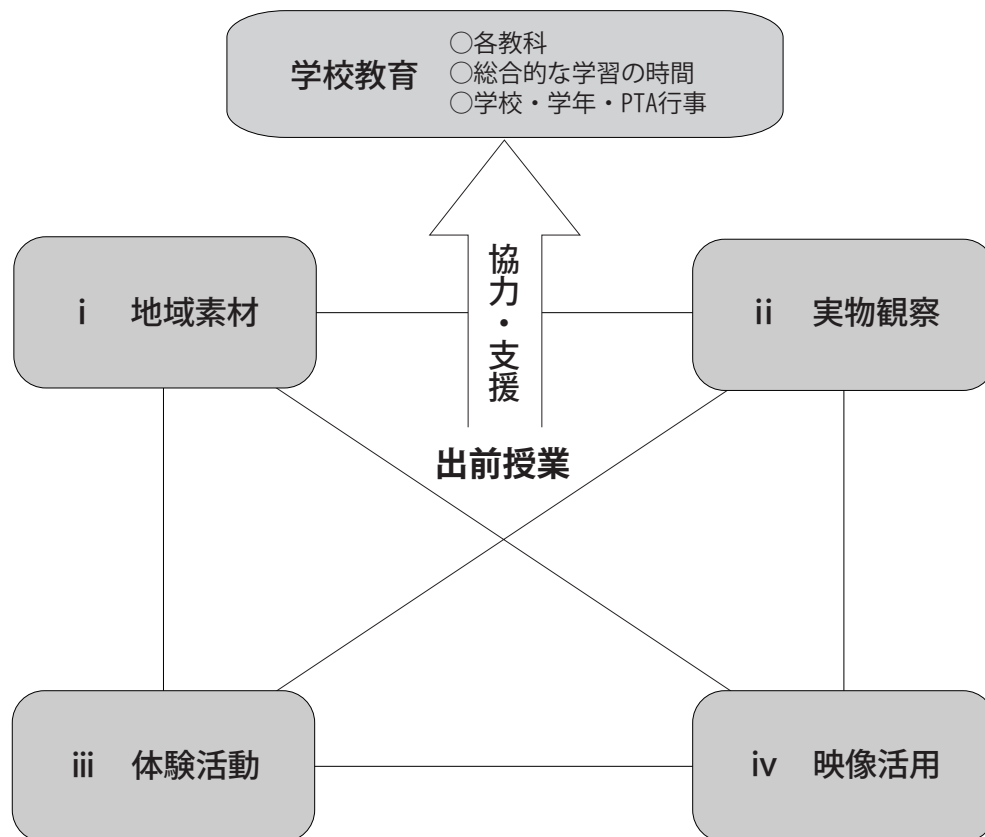


図1 出前授業の構造概念図

・縄文食（縄文風クッキー）づくり

食の体験については、復元が難しい部分があり<sup>3)</sup>、当時あった食材を用いてアレンジを加えたものとなる。それでも、現代食品に慣れきってしまった子供たちにとっては新鮮な驚きがある。

iv 映像活用

パソコンを使った映像表現による資料提示である。具体的には、プレゼンテーションソフトを用いてプロジェクターで資料を投影し、写真上で建物を復元したり、アニメーション機能で子供たちの知的好奇心を喚起しようという方法である。教室に運べない重要遺物や遺構は画像として紹介することでイメージがつかみやすくなるという利点がある。

4 出前授業における考古資料の活用

調査研究を業務の中心とする埋文センターが、学校へ出前講座を行う意義として特筆できることは、出土した考古遺物を活用して授業展開できることである。また、

検出された遺構や遺跡の写真情報の活用も考古遺物と同様の意義を持つといえる。ここでは、遺跡から得られた考古学的データを授業の中でいかに活用するかを、いくつかのカテゴリで紹介していく。

A 周辺地域から出土した考古資料をいかに活用するか

1 出土品の活用

出土した遺物は多くの人々の目に触れるため、博物



プレゼンテーションソフトを利用した授業の様子

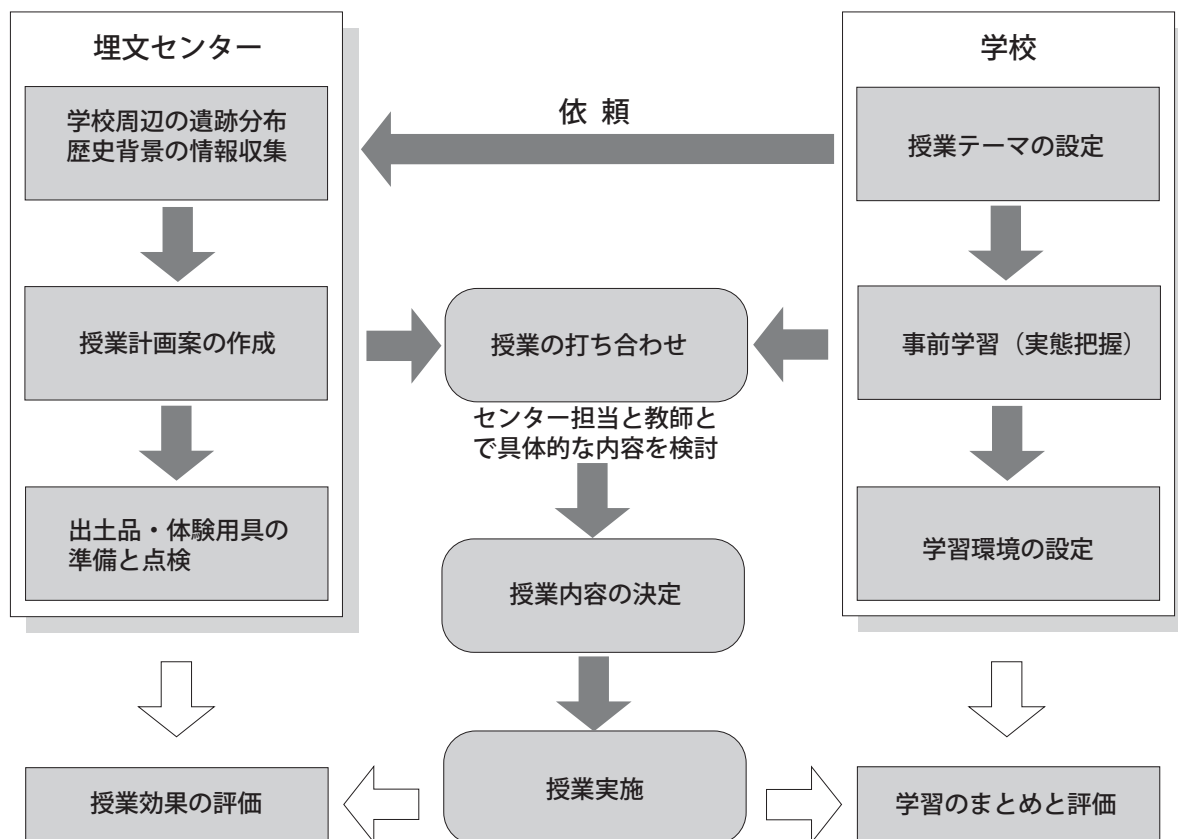


図3 出前授業実施の流れ

館では通常ガラスケースに入り、厳重な管理の下に置かれている。展示の常道ともいえるわけであるが、教育への活用という視点ではどうしても脆弱と言わざるを得ない。その点、埋文センターは組織としての性格上、研究対象として遺物に触れる場面が多く、教育的活用がし易いと考えられる。また、ほとんど日の目を見ることのない眠ったままの破片資料はもっと活用されてしかるべきと思われる。当センターでは破片資料も完形品も可能な限り直に手にとってもらえるような方針を貫いた。

## 2 学校に保管している遺物の活用

小学校等で意外とあるケースが、周辺遺跡から出土した土器や石器が学校に保管されていることである。これらは、地域住民が、学校の先生に聞けばわかるかもしれないといった期待から持ってきたものや、学校で活用してほしいといった希望で持ち込まれたケースがほとんどである。

しかしながら、学校の教師では、それらを十分に理解することができず、整理せずに埃をかぶってきたものが意外と多いのである。

センター職員がそうした遺物を実見し、整理方法を教え、授業に生かしていくこと<sup>4)</sup>は、大変有意義な活動となる。

## B 遺跡地図をいかに活用するか

### 1 周囲に存在する遺跡を知る

学校の近くに遺跡はないか、出前授業の前には必ず、遺跡地図を使って確認し、学区にある遺跡の数や分布を地図にまとめ、紹介することを取り入れてきた。こうした取り組みによって、子供たちは遺跡を身近なものとしてとらえることができるのである。中には、学校敷地内



地域素材（実物）を活用した土器づくり体験



石器カッターを使った生活体験

が遺跡であったり、自分の家の隣が遺跡であることを知らずに驚いたケースがあり、新しい発見があるといえる。

## C 考古遺物の教材化

考古資料を教材化する試みは各地域で熱心に行われており（能登・原 1998）、後発の我々は学ぶべき点が多い。本センターではそうした各地での成果を学び、これまで教材として採り入れてきた。我々でアレンジを加えたものも含めて幾つか例をあげてみる。

### 1 石器カッターの活用

「石器は本当に切れるのか。」

子供の疑問は実に素朴でありながら、本質に迫る疑問を私たちに投げかける。実物の石器で実験するわけにはいかないことから、頁岩・黒曜石を割って作り出した薄片に柄を付け石器カッターとして教材化した<sup>2)</sup>。素材は本物の石器と同じものだけに、その切れ味を試すには絶好である。切るものは、野菜や果物から画用紙まで、実に多くのものが切れるということが体験できる。中には自分の手を切ってしまう子もいるが、それもまた生きた体験といえるのである。

### 2 復元弓矢の活用

弓矢の使用は子供達にとって最も楽しい体験活動の一つである。様々な種類の木を素材とした弓を作成し、しなり具合や矢の飛び具合を確認したりすることは、現代社会の生活ではなかなかできない体験であるし、最初からのまともに当たる子供はほとんどいない。

「どうやったら遠くの的に正確に当てることができるのか。」

こうした発問を体験活動の中で投げかけることで教育効果が高まると考えられる。子供たちは、弦のテンショ



ンや引き具合、打つ角度など色々な条件を自分で考え、的に向かうのである。

### 3 縄文風衣装の製作と復元上必要な理解

縄文の人々はどんな服装をしていたのか、私たちは出土遺物からその断片を知りうるができる。各地で発見されている編布や土偶のデザインがそのヒントを与えてくれる。教材化にあたっては、これまで分かっていることを踏まえて、衣装製作を行っている。素材については手近な麻袋を使用し、毛糸で絵柄を刺繍した。絵柄は土偶の胴部デザインを意匠としている。色については赤・黒を基調としたが、藍、緑など確認例のないものも存在の可能性を否定せずに、子供達への学習の広がりや意欲づけのために使用した。

また、子供たちに衣装を着用させる際には、縄文の衣服そのものは出土例はなく、様々なデータの断片を集めて復元していることを理解させることは忘れてはならない。

### D 考古遺物をどう体験活動につなげるか

#### 1 ものづくり体験と実物展示

ものをつくるという体験は、時間と労力がかかる割には、その教育的効果を疑問視する風潮もある。当センターでは現在、勾玉づくり・アンギン編み・土器づくりを体験メニューとして採りあげているが、これらはつくることに主眼を置いているのではなく、つくることによって、いにしえの人々の生活や精神を考えたり、つくるための工夫を知ること主眼を置いている。

ともすれば、作って終わり・楽しかった、で済ませる



東北芸工大 北野助教授(中央)を迎えての土器焼成実験及び教材研究状況(奥 縄文焼成、手前 弥生焼成)

ことができる部分だけに、何に気づき・感じるかを大切にすることが必要である。そのためには、必ず本物を観察し製作に生かすことを、授業の中に取り入れていかなければならない。

美術・工芸等の分野では、自由な発想やデザインは子供の個性伸長上好ましくとらえられるが、ものづくり体験においては、扱い方に注意を要する部分といえる。なぜなら、勾玉・アンギン・土器、それぞれの中に固有のデザインや製作技法が存在し、その文化的作法に基づいて製作されていることは、整理作業で遺物に向かった時、考古学に携わる者なら誰も気づくところである。

ものづくり体験の目指すところは、いにしえの作法(文化としての規制)を学ぶことにあり、そこに自由で創造的なデザインや発想は、介在してはならないと考える。



実物観察風景

## 5 授業実践

出前授業では、いつも同じ授業はないと考えて、学校の求めるものに応じた内容を準備している。なぜなら、学校によって、必ず授業のねらいが変わってくるはずであり、それに答えようとすると埋文センターとしての準備やカリキュラムも、それ相応のものを準備する必要があるからである。18件の依頼の分野は以下の状況である。

表1 出前授業依頼分野

中学校	社会科	3
	総合的な学習	1
	行事	1
小学校	社会科	5
	総合的な学習	7
	行事	1

表1中からは、中学校では出前授業の利用を教科の中



矢とばし 生活体験風景

での1コマと位置づける傾向にあり、小学校では教科と総合的な学習と両面で活用して行こうとする傾向がうかがえる。

以下、主な実践としての授業内容を紹介する。

#### 実践例1 中学校社会科「君も考古学者」

##### <授業内容>

縄文土器と弥生土器の実物に触れ・観察し、その違いを明らかにして、両時代の特徴をとらえることから、縄文から弥生への歴史の流れを理解する計画を組んだ。観察のポイントを学習シートにまとめることで両時代の土器の形、文様の特徴を理解することができた。本実践では完形と破片の両方の遺物を利用した。更に、実際に縄文原体を作り粘土に施文し、縄文土器の由来と土器のつくり方を考えた。

#### 実践例2 中学校総合「地域に眠る文化財」

##### <授業内容>

自分たちの住む市で近年発掘された縄文遺跡の遺物を見、触れることで遺跡が身近なものであることを理解した。学校敷地が遺跡であることを知り、生徒は驚いていた。文化財がかけがえのない財産であることを考えた。

その後、興味のある題材を自分で調べ、新聞として発行し授業のまとめを行っている。

#### 実践例4 小学校社会科「大昔のくらしをさぐるう」

##### <授業内容>

縄文時代のいろいろな生活場面を体験し、理解度を高めた。小学校の多くの学校で求めてきたパターンの授業カリキュラムである。学校によって単元の導入部分とし

て採り入れたり、学習の仕上げや確認として体験活動を行ったりと多種多様であった。本質的には体験活動で子供たちの理解度を上げることをねらいとしていた。

#### 実践例5 小学校総合「縄文人の生活 再発見」

##### <授業内容>

学校の隣にある縄文遺跡をきっかけに地域の歴史や自然を学習し、その良さを確認した。半年にわたるカリキュラムを組み<sup>6)</sup>、センターでは後半で体験活動による支援を行った。まとめの活動としておこなったディベートでは、ゲストティーチャーとして子供たちの疑問に答え、子供たちは地域のすばらしさを確認した。

#### 実践例6 中学校選択社会「古代米に挑戦！」

##### <授業内容>

学区内に存在する奈良・平安時代の遺跡をきっかけに古代の学習を行う。中学校の教科書では得てして律令制度とその政治的中心地の学習が主体になるところに、地元の遺跡をきっかけに、庶民のくらしと貴族の暮らしを対比させ特徴を浮き彫りにしていった。古代米とされる赤米と黒米を準備し、白米と三つの試食を通して、当時の生活の一端に触れた。

#### 実践例7 小学校総合「縄文土器づくり」

##### <授業内容>

1ヶ月半にわたり、縄文土器を自分たちでつくる活動を行う。素地を練り上げ、成形、乾燥、焼成まですべての工程をおこなった。成形前に作りたい縄文土器の形を図書館で調べ、自分で描き、縄文土器のルールに従って製作を行った。燃焼材の準備も子供たちが自分達の手で地域から集めてきて行った。

尚、上記のものも含めた今年度の実践は、次ページの表2に一覧としてまとめてみた<sup>7)</sup>ので参照していただきたい。

## 6 おわりに

### 今後の課題と展望

山形県埋蔵文化財センターでの学校教育への協力事業

表2 平成14年度 出前授業一覧

No.	期日	学校名	対象学年	対象児童数	教科	テーマ	時間	体験項目								派遣職員数	備考
								弓	服	石器	火起し	勾玉	アンギン	クッキー	土器製作		
1	4月23日	大石町立亀井田小学校	3~6	34	総合的な学習	大昔の暮らしをさぐる	5・6校時	-	○	○	○	-	-	-	-	4	報道取材 S A Y・NHK・T U Y・山新・毎日・読売・河北
2	4月25日	山形市立蔵王第二小学校	6	42	社会 歴史	歴史の扉はすぐそばに	3・4校時	○	○	○	○	-	-	-	-	3	報道取材 朝日 西ノ前土 偶レブリカ持 参
3	4月30日	山形市立第六小学校	6	100	社会 歴史	大昔の暮らしをさぐる	1・2校時	○	○	○	○	-	-	-	-	4	
4	5月8日	山形市立桜田小学校	6	116	社会 歴史	さあ開こう歴史の扉を	2・3校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	
5	5月9日	山形市立鈴川小学校	6	145	社会 歴史	古代のくらしのなぞをさぐる	5・6校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	
6	5月14日	新庄市立新庄中学校	1	139	総合的な学習	地域に眠る文化財	5校時	-	○	○	-	-	-	-	-	2	総合的学習の材料の提供
7	5月21日	上市市立東小学校	2 3 6	7	総合的な学習	全校ふるさと学習「発見いっぱいコース」	1~3校時	-	-	-	-	-	-	-	○	4	学年オープン の総合的学習 (土器製作)
8	5月30日	天童市立第四中学校	1	156	社会 歴史	縄文時代と弥生時代の暮らし	3・4校時 および5・6校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	2クラスごとに2回の授業を行う
9	6月6日	山形市立西山形小学校	6	22	社会 歴史	とかみの里の歴史を探ろう	2・3校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	
10	6月11日	山形市立千歳小学校	6	76	総合的な学習	ものづくり学習 導入部分	5・6校時	○	○	○	-	-	-	-	-	6	
11	6月20・21日	上市市立北中学校	1	150	社会 歴史	きみも考古学者—土器から歴史を探る	3校時および4校時	土器の観察を中心に授業を展開。2日にわたり、各1時間行う。計4コマ								4	計4クラス個別授業
12	6月29日	山形市立大曾根小学校	6	15	学年親子行事	大曾根の歴史を知ろう	午前9時~夕方	地域の歴史の勉強、体育館での勾玉づくり、石器による野菜切、土器による夕食づくり								1	P T A 親子行事
13	9月26日	寒河江市立醍醐小学校	6	15	総合的な学習	縄文人の生活 再発見	3・4校時	○	○	-	○	○	○	-	-	3	報道取材 S A Y「きいて委員会」
14	10月3日	鶴岡市立湯野浜小学校	6	36	総合的な学習	縄文人の知恵と工夫(仮題)	3・4校時	○	○	○	○	-	-	-	-	4	
15	10月25日	天童市立第四中学校	オープン	35	文化祭行事	縄文クッキーづくり	9時30分~12時	-	-	-	-	-	-	○	-	4	
16	10月31日 11月7日 11月25日	中山町立長崎小学校	5	35	総合的な学習	原始人体験「縄文土器づくり」	9時~12時30分	-	-	-	-	-	-	-	○	各1~4	
17	11月26日	真室川町立釜淵小学校	5・6	28	総合的な学習	地域の歴史、釜淵遺跡	5・6校時	-	-	-	-	-	-	○	-	4	釜淵C遺跡の話とクッキーづくり
18	12月9日	山形市立高橋中学校	1	19	選択社会科	歴史人物史をつくろう(発展食について)古代米に挑戦!	3・4校時	赤米・黒米・白米の試食								5	身近な遺跡と赤米・黒米試食

出前授業 18校 合計児童数1,170名

は、まだ緒についたばかりである。試行錯誤を繰り返しながら、ノウハウを積み上げてきたものであり、まだまだ不十分であることは否めない。授業をしながら多くの解決すべき課題も浮き彫りとなってきたので以下にまとめる。

#### ○専門セクションの設置と資料管理

学校への派遣には複数の調査員が派遣されない限り、出前授業は成立しない。研究課及び研究課兼務職員が中心となって出前授業を支えてきたが、今後はその人的配置を組織全体の中でどうやりくりしていくかが大きな問題である。調査員である以上、学校への派遣や準備をしながらでも、遺跡の発掘や整理作業、報告書の執筆をしながらの業務となる。また、授業案の作成や教材開発には多大な労力を必要とし、それらのノウハウを蓄積するには、片手間で行うことはできない。教材としての資料管理も子供たちを対象とした場合には、破損を含め様々なケースが予測される（野中 2001）。メンテナンスを含めた専門セクションを組織内に設置し、学校との橋渡しと情報交換を行うことが最も望まれるところである。

#### ○意識改革と人材育成

出前授業では教育職派遣の調査員が主体となって、そこにプロパー職員が専門分野の補完をするという役割分担を組み行ってきた。ほとんどの調査員が一度は授業を体験しているが、一部の担当者を除くと主体となる人材は希薄である。また、報告書作成の妨げとなっているとの考え方も少なからず存在し、必ずしも全体が同じベクトルを向いているわけではない。普及事業の中の重要な位置づけである意識を更に高めていく必要がある。

#### ○他との連携強化

山形県には当センターの他に県立うきたむ風土記の丘考古資料館や県立博物館が埋蔵文化財の普及啓蒙の一角を担っている。市町村の文化財担当部署も同様である。

今後はこうした機関と相互に連携しながら教材の開発や資料整備の情報交換を図っていくことが考えられよう。他県の埋文センターとの意見交換や連携も必要になってくる（赤山・小林 2001）。

また、教育分野の研究機関である県教育センターとも指導方法や評価や教育効果についての研究を深めていく必要性を感じている。

最後になりましたが、本稿をまとめるにあたり、協力いただいた実践校の先生方と子供たち、出前授業を一緒に推進してきた長橋至研究主幹、山口博之調査研究員、積極的に加わってくれた職員各位の皆様にご感謝の意を表し、末筆とさせていただきます。

※ 本稿は平成 14 年 6 月に刊行した「埋文やまがた」第 23 号に掲載した出前授業の方法と考え方を体系化し、膨らませたものである。

#### 註

- 平成 9 年 8 月に出された文化庁次長通知「出土品の取り扱いについて」の中で学校教育における活用の充実が求められている。以下この部分を引用する。  
出土品は、こども達が直接、見て、触れながら、地域の歴史や文化を学ぶことができる貴重な資料であるため、これを学校教育における「生きた教材」として、一層積極的に活用すること。  
この場合、地方公共団体においては、出土品の提供や資料の作成・提供、埋蔵文化財担当専門職員による説明等の協力を行うことも必要である。
- 平成 12 年に行われた石川県埋文での体験イベントでの活動から多くのアイデアをいただいている。石器カッターの教材化は石川埋文の実践にもとづくものである。
- 縄文クッキーの成分は帯広畜産大の中野益男教授による分析が行われているが、近年科学的に再検証する必要があるとの意見が出されている。
- 平成 14 年 8 月にセンター内で行った上山市社会科研修会の講座として山口博之調査研究員がまとめた内容を踏まえたものである。
- 山形県では高島町押出遺跡から編布が出土している。
- 寒河江市醍醐小学校 6 年生の実践である。担任の小川尚道教諭の地域の遺跡に対する深い造詣によって綿密なカリキュラムが組まれた。
- 表の作成は長橋至研究主幹の手によるものを活用した。

#### 引用文献

- 石井伸明・川島健・野中仁 2001 「収蔵資料の学校における活用」『研究紀要』第 16 号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
能登健・原雅信 1998 「教科書の中にある群馬の遺跡 - 教育施設における展示とその映像化について -」『研究紀要』15（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団  
赤山容造・小林大悟 2001 「誰のための発掘か？発掘成果の教育利用推進に向けての試み」『研究紀要』19（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団  
中村光司 2001 「埋文センターから教室へのアプローチ - 小学校を対象とした出張講座の実践例 -」『考古学研究』第 48 巻第 1 号 考古学研究会  
吉久正見 2001 「小 6 総合学習『原始時代探検隊』に取り組んで」『考古学研究』第 48 巻第 1 号 考古学研究会  
（財）山形県埋蔵文化財センター 2002 『埋文やまがた』第 23 号（財）山形県埋蔵文化財センター